The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 和漢朗詠集の排列について |
| Author(s) | |
| Citation | 令和3（2021）年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2022 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/85590 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式６

申請先学部　　文学部　採択番号　No.６

# 令和３年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ふりがな<br>氏名 | もも い　はな<br>百井　花 | 学部<br>学科 | 文学部<br>人文学科 | 学年 | 三年 |
| ふりがな<br>共同<br>研究者氏名 | | 学部<br>学科 | | 学年 | 年 |
| | | | | | 年 |
| | | | | | 年 |
| アドバイザー教員<br>氏名 | 滝川　幸司 | 所属 | 文学研究科 | | |
| 研究課題名 | 和漢朗詠集の排列について | | | | |
| 研究成果の概要 | 研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。（先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。） | | | | |

**研究目的**

『和漢朗詠集』延いては作者独自の排列意識を浮き彫りにすること。

**研究計画と方法**

① 調査　『和漢朗詠集』と『古今和歌集』『拾遺抄』を排列の観点から比較する。他に、藤原公任撰の他の歌集（『金玉和歌集』『三十六人撰』など）や『和漢朗詠集』の取材源である作品（『千載佳句』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『古今和歌六帖』など）をも考察する。必要に応じて中古以前の文学作品は広く取り扱う。

② 考察　調査した用例をもとに『和漢朗詠集』の排列意識について考察する。先行研究で既に指摘されている排列の展開を踏まえた上で新たな規則を検討する。必要に応じて他の作品の排列に関する書籍や論文を読み、本考察の参考とする。

③ 総括　上記①②より、『和漢朗詠集』延いては作者の排列意識の検討結果をまとめる。

**研究成果**

## 和漢朗詠集の排列について

大阪大学文学部人文学科日本文学専修三回生　百井　花

一、はじめに

『和漢朗詠集』は平安時代中期に成立した藤原公任撰の詩歌集である。『和漢朗詠集』の研究は詩句や和歌の解釈、出典、他作品への影響などにおいて豊富である。しかし詩句や和歌の排列をはじめとする『和漢朗詠集』の編纂意識に関する研究はほとんど行われていない。数少ない編纂意識の

研究[1]も、一部の項目のみが論じられている。排列の性質上、一部のみを取り上げてもそれが直ちに『和漢朗詠集』全体に流れる編纂意識であるとは言い切れず、より全体的な考察を要すると思われる。そこで本研究では、最初に全項目共通の意識を捉えたうえで各項目の編纂意識を詳らかにしたい。

全項目共通の意識とは何か。『和漢朗詠集』の排列は「中国人漢詩句（散文→韻文）・日本人漢詩句（散文→韻文）・和歌」と展開することは既に指摘されている。また、先行研究ではっきりとは指摘されていないものの、各分類のなかは作者の年代順によって整列されている。これら二つは全項目共通の規則だと思われる。

これら二つの規則の例外にこそ、撰者の強いこだわり延いては編纂意識を読み取れるのではないか。本研究ではまず全項目から二つの規則の例外を抽出したうえで分類し、どのような意図をもって規則の例外となったかを考察することで撰者の編纂意識を明らかにしたい。

なお、『和漢朗詠集』本文と訓読文の引用は『現代語訳付き和漢朗詠集』[2]（三木雅博、平成二五年、角川ソフィア文庫）に拠る。

二、例外の抽出・分類

『和漢朗詠集』全項目の作者とその年代を表にまとめ[3]、その例外[4]を抽出した。各項目から「中国賦」「中国詩」「日本賦」「日本詩」「和歌」それぞれを１単位として例外を数えると全体で 54 単位になった。特に、村上天皇など御製において特異な排列を成すことがわかった。村上天皇とその他天皇にまつわる例外は、以下の通りである。

| | | |
|---|---|---|
| 89 | 村上御製 | 926～967 |
| 90 | 江相公 | 886～957 |
| 91 | 菅三品 | 899～981 |
| 92 | 菅三品 | 899～891 |
| 378 | 村上御製 | 926～967 |
| 379 | 菅 | 845～903 |
| 380 | 尊敬 | ？～953,4 |
| 600 | 村上御製 | 926～967 |
| 601 | 空也上人 | 903～972 |
| 602 | 伝教大師 | 767～822 |
| 603 | 左相府 | 966～1027 |

| | | |
|---|---|---|
| 658 | 淑望 | ？～919 |
| 659 | 菅三品 | 899～981 |

[1] 『和漢朗詠集』の編纂意識に関する先行研究では、排列は概ね以下により展開するとされる。①時の推移②循環的構造③対立的構造。これらは一部の項目の個別的な編纂意識を分類したものといえ、その項目が偶然そう読めた可能性を否定できない。『和漢朗詠集』全体を概観した分類とまではいえない。

[2] 平安中期書写の「粘葉本和漢朗詠集」の複製本『御物倭漢朗詠集』を底本とする。

[3] 作者名と生没年については『平安時代史事典』、『和歌文学大辞典』、『現代語訳付き和漢朗詠集』を参考とした。

[4] 作者名や生没年が未詳で、年代順になっているか正しく判断できないものについては例外の抽出から除いた。

| | | |
|---|---|---|
| 660 | 菅三品 | 899～981 |
| 661 | 江 | 886～957 |
| 669 | 保胤 | ？～1002 |
| 670 | 雅規 | 919～979 |
| 671 | 江 | 886～957 |
| 672 | 菅三品 | 899～981 |

三、例外の考察

① 漸くに薫ず臘雪の新たに封ずる裏　偸かに綻ぶ春風の未だ扇がざる先（89・春・梅・村上御製）

② 翅は群を得たるに似たり浦に栖む鶴　心は興に乗るべし舟に棹さす人（378・冬・雪・村上御製）

③ いつしかと君にと思ひし若菜をば法のためにぞ今日は摘みつる（600・仏事・村上御製）

村上天皇御製はいずれも日本漢詩句あるいは和歌の冒頭に排されている。巻頭歌を意識した排列であることがわかる。万葉集の巻頭歌が雄略天皇作とされるように、天皇御製を巻頭に置くことはもとよりあったが、この傾向は『和漢朗詠集』成立当時にはみられない。天皇御製を巻頭に置く流れが盛んになったのは、新古今集頃[5]のことである。村上御製は全部で四作収められている。残り一つは 748 番歌であるが、これは冒頭ではない。この和歌は前後が作者未詳であるため、分析はなしえない。が、これを除いても撰者が村上御製を冒頭に置こうとする意図はあると言ってよいと思われる。なぜ撰者が村上御製を特別に冒頭へ置こうとしたのかは、推測するほかない。村上天皇は 967 年に没し、撰者は 966 年に生誕する。二人の生涯はほぼすれ違っている。撰者は政権が藤原兼家、道隆、道長と移るにつれ、政界での地位は望めなくなった。政界への不満[6]も募っていたとみえる。歌人としての活動に注力するさい、天皇自ら歌人でもあった村上天皇は意識されただろう。村上天皇は醍醐天皇と並び、聖帝とされ理想的な治世（聖代）であったと評される。この評価は村上天皇崩御後も長く残り、一条朝に盛んとなった。村上天皇を聖帝とみなす姿勢は強い不遇意識を持つ文人貴族層をはじめ貴族層全体に行き渡ったとされるが、撰者もまたその一人だったと思われる。また、貴族社会に広く浸透する村上天皇礼賛の傾向だけでなく、撰者には個人的に村上天皇を追慕する所以があった。そもそも撰者を名門たらしめるのも村上天皇の影響が大きいからである。撰者の妻は村上天皇の孫であり、撰者と交友の深いいとこ[7]は村上天皇の皇子である。村上天皇は撰者にとって結びつきの強い権威であった。また、『和漢朗詠集』は撰者の娘の祝儀の引き出物として贈られた[8]が、撰者の娘は村上天皇の血縁であることも大きい。自身や娘とゆかりの深い村上天皇を礼賛することでその権威を確かとし、延いては自らの家門の威儀を整えることを図ったのではないか。

---

[5] 新古今集では後鳥羽院をはじめ天皇御製が巻頭・巻軸を多数占める。これは後鳥羽院の政治的意図を含むものとされる。

[6] 『本朝世紀』正暦 4 年 12 月 4 日条。

[7] 具平親王（964～1009）。村上天皇の第七皇子。公任と柿本人麻呂と紀貫之の歌の優劣を廻って論争したエピソードが『古事談』にみえる。

[8] 倭漢朗詠抄上下巻也。或人云、二条関白為レ聟給之時、撰レ之誂二行成卿一清書被レ入二御手箱一云々。

④ 仁秋津洲の外に流れ　恵筑波山の陰よりも茂し
淵変じて瀬と作る声　寂寂として口を閉づ
沙長じて巌と為る頌　洋洋として耳に満てり（658・帝王付法皇・淑望）

⑤ 梁元の昔の遊び　春王の月漸くに落ちぬ
周穆の新たなる会　西母が雲帰りなんと欲（659・帝王付法皇・菅三品）

⑥ 政を布く庭　風流未だ必ずしも崐閬に敵しからず　之を兼ねたる者は此の地なり
文を好みたまふ世　徳化未だ必ずしも黄炎に光はず　之を兼ねたまへる者は我が君なり
（660・帝王付法皇・菅三品）

⑦ 栄啓期が三楽を歌ひし　未だ常楽の門に到らず
皇甫謐が百王を述べたる　猶ほ法王の道には暗かりき（661・帝王付法皇・江）

菅三品が江に先行している。それぞれ天皇・法皇を礼賛する賦である。658 番賦は「天皇の人徳は国内外にいきわたり、恩恵は筑波山の木陰よりも深々としている」と醍醐天皇を讃える。659 番賦は村上天皇の内宴が終わった時の様子を中国の故事を用いて讃える。660 番賦は「文を好みたまふ世　徳化未だ必ずしも黄炎に光はず　之を兼ねたまへる者は我が君なり」とあるように、文学と徳化両方を兼ね備える村上天皇を賛美する賦である。661 番賦は仏門に入った宇多法皇を中国の故事を用いて讃える賦である。項目は「帝王付法皇」である。天皇が一つ目、法皇が二つ目のテーマであることがわかる。江の賦は宇多法皇を詠むため、帝王の後ろに排列されたと思われる。

本排列で特に注目すべきは天皇・法皇の顔ぶれである。醍醐天皇、村上天皇、宇多法皇である。ここにも先述のような撰者の編纂意図がみえる。皆、撰者らの直系の先祖といえる。撰者は意識的に自身と娘にゆかりのある天皇・法皇を収めたと思われる。この項目最後の和歌が小松天皇御製であることもそれを裏付ける。帝王たる撰者らの先祖の作品を収めることで自分たちをも権威づけようとしたのである。そしてそれだけではなく、娘の結婚に際して、娘の血筋を明らかにせんとする親としての姿勢が伺える。『和漢朗詠集』は教材[9]としての面が強く受け取られるが、それ以前に親から娘へと伝える、自分たちの家系に目を向けた私的な一面があると思われる。

また、皇統以外でも村上天皇への格別の思いはあっただろう。おそらくは 660 番賦に撰者も共感するところがあったからこそ、これを収めたのではないだろうか。村上天皇は文人を重宝し芸能を奨励し、王朝的美意識の構築を担った。世を治めながら、風流や文学を能くする村上天皇へ憧憬の念を抱き、敬慕したと思われる。それは次の親王付王孫からもわかる。

⑧ 巻を開いて已に子たる道を知りぬ　秋の風に悵望す鼎湖の雲（669・親王付王孫・保胤）

⑨ 我が王の孝行は先づ何くにか到る　梧岫の秋風一片の煙（670・親王付王孫・雅規）

⑩ 此の花は是れ人間の種に非ず　瓊樹の枝の頭第二の花なり（671・親王付王孫・江）

⑪ 此の花は是れ人間の種に非ず　再び平台一片の霞に養はれたり（672・親王付王孫・菅三品）

保胤・雅規が江・菅三品に先行している。項目は「親王付王孫」である。親王が一つ目、王孫が二つ目のテーマであることがわかる。江・菅三品は王孫[10]を詠むため、親王の後ろに排列されたと思われる。669 番詩と 670 番詩は親王をテーマとするが、それぞれ「秋の風に悵望す鼎湖の雲[11]」「梧

[9] 『和漢朗詠集』は後世幼学書として多く使われた。

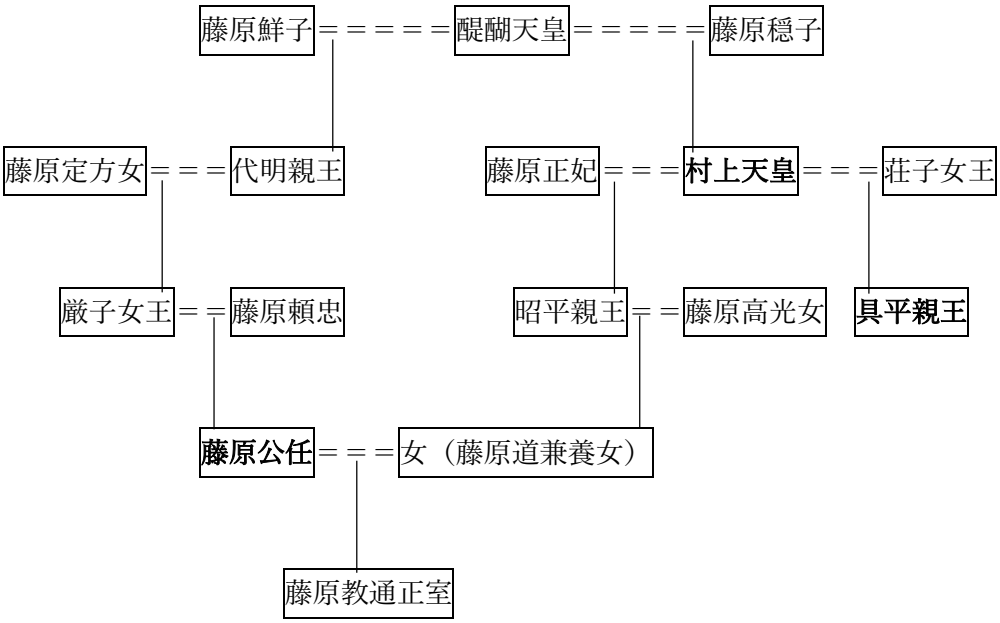
[10] 王孫が誰であるかは特定できないとされる。また、王孫とするのも嘉禎本、専大本、貞和本の詩題「名花閑軒に在り、王孫学に入る」に拠る。

[11] 上古の帝王、黄帝が龍に乗って天に昇った所。残された人々は天を仰いで悲しんだとされる。

岫[12]の秋風一片の煙」とあるように村上天皇の崩御を嘆き悲しみ、偲ぶ詩であることがわかる。親王の項目においても、亡き村上天皇を偲ぶ詩を収める点に、撰者の村上天皇への並々ならぬ思いがわかる。

以上のように、村上天皇は項目の最初に排列され、「帝王」項目・「親王」項目ではそれぞれ二作にわたって慕われ礼賛される。『和漢朗詠集』における村上天皇の、無視できない存在感は明らかだと思われる。

〈系図〉




四、参考文献

『現代語訳付き和漢朗詠集』（三木雅博、平成二五年、角川ソフィア文庫）
『新編日本古典文学全集和漢朗詠集』（菅野禮行、平成十一年、小学館）
『和歌文学大系 47 和漢朗詠集/新撰朗詠集』（佐藤道生・柳沢良一、平成二三年、明治書院）
『平安時代史事典』（角田文衞、平成六年、角川書店）
『平安文学研究ハンドブック』（田中登・山本登朗、平成十六年、和泉書院）
『和漢朗詠集とその享受増訂版』（三木雅博、令和三年、勉誠出版）
『『和漢朗詠集』とその受容』（田中幹子、平成十八年、和泉書院）
「『新古今和歌集』の天皇歌巻頭・巻軸歌を中心に後鳥羽院の撰集意図との関わりにおいて」（榊原照枝、平成十四年、語文 114 巻 p26-38）
「『大鏡』〈昔物語〉における村上聖代―醍醐聖代との比較を通じて―」（秋本宏徳、平成十六年、中古文学 73 巻 p56-67）
日本文学 web 図書館『新編国歌大観』『和歌文学大辞典』『歌ことば歌枕大辞典』
ジャパンナレッジ『日本国語大辞典』『国史大辞典』『群書類従』

[12] 伝説上の聖王、舜が葬られた蒼梧の地。転じて、先帝の墓所。先帝。